

行事によって形成される関係性がもたらす 行動と心理的变化に関する試論

—祭りの後の祭り「打ち上げ」の聞き取り調査を手がかりにして—

**A trial study on behavior and psychological changes by relationship
formed through school events**

—Based on the interview of “Uchiage” as a festival after the festival—

中 西 裕
玉 木 博 章

行事によって形成される関係性がもたらす 行動と心理的变化に関する試論

—祭りの後の祭り「打ち上げ」の聞き取り調査を手がかりにして—

A trial study on behavior and psychological changes by relationship
formed through school events
—Based on the interview of “Uchiage” as a festival after the festival—

中 西 裕 (人文科学部)
玉 木 博 章 (愛知県立総合看護専門学校)

1 はじめに —問題の所在と本稿の趣旨—

現行の高等学校学習指導要領の特別活動に関する部分では、学校行事の目的について次のように記述されている。

学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活や社会生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。(注1)

学校行事（以下「行事」）とは、人間関係を再構築し、公共的な価値観を育む教育的な時間であると考えられる。これに関連し、例えば藤井（2012）^(注2)は、文化活動には日常を異化する力があることに触れながら、文化的行事には非日常の側から日常を眺め直し、日常への違和感を生み出すことで日常を作り替えていく力があると述べている。実際に桑原(2008)^(注3)や藤田（2008）^(注4)によって、それぞれ行事を通した効果的な実践によって生徒達が変化した事例も報告されており、教育課程における行事の重要性を確認することができる。

さて、そのような行事に関連して、ここで行事の終わり際の教員による訓辞の中で誰もが聞いたことがある「家に帰るまでが遠足」という言葉を思い出してみたい。よく耳にするこの言葉は直接的には「高揚感と解放感によって事故や間違いを起こさぬよう、気を抜かずには帰りなさい」という教育的配慮を示す表現と考えられる。しかしながら先述した藤井に従って言い換えれば、このことは「異化が起こる非日常が日常に戻るまでがその行事なのだ」という捉え方もできる。つまり、ある行事が終了し、生徒達それぞれが帰宅するか、もしくは翌日いつも通りの生活に戻るまで行事の余韻は続いているため、行事そのものが終わっても、日常の異化自体はまだ終わっていないのである。実際に、行事後の高揚感でその日一日はい

つもとは異なる感覚で生活していたり、その日の帰りは友達と普段は話せないことが話せたり、といった体験は、誰しも覚えのあるところだろう。

Z. バウマンは、祭りの場における一時的な連帯感を「カーニヴァルのつながり」、それを形作るコミュニティを「カーニヴァルコミュニティ」と称している^(注5)。そしてカーニヴァルコミュニティでは、人間の絆が本当に大事になる時にはコミュニティ自体が雲散霧消するということが述べられている。バウマンよりも早くカーニヴァルという用語を哲学的に用いた M. バフチンによれば、カーニヴァルの本来的な意味は、そういった「盛り上がり」だけではなく、道化が王になり戴冠と奪冠をする両義性^(注6)だと言い表すことができる。祭りでは、道化が王になる。つまり本来、祭りそのものは藤井（2012）^(注7)が述べるような日常の異化を生じさせ、非日常の側から日常を眺め直し、日常への違和感を生み出すことで日常を作り替えていくものなのだ。

ここで民俗学的な見地に立てば、行事にはその原初的な要素としての祝祭性を見ることができだろう。神社における祭礼（例大祭）は一般に「宵祭」（神迎いの儀式）・「本祭」（祝祭の本体）・「後祭」（神送りの儀式）という三部構成で行われる。神が来訪することで非日常の時間が開始され、祭りが済むと神送りの儀式によって日常が回復するのである。行事をこの祭礼のアナロジーで捉えれば、行事の「後祭」は公式には（たとえば体育祭の）閉会式である。そこで行事の規模と性格によっていわば「祭祀」を主催する立場である校長・教頭・学年主任といった教員からの訓示があり、公式にはそれで「神」が送られ非日常は終了するはずである。先述の「家に帰るまでが遠足」といった使い古された言辭は、教員の意図からすれば、生徒の行動に対する学校のコントロールが保護者の元に生徒が無事に戻る時点にまで及ぶべきことを述べながら、しかし、それと表裏一体となった「（実は）家に帰るまでは非日常が終わらない」という現象を示唆するものであることにおいて、きわめて象徴的である。この両義性を持った「家に帰るまで」の特別な時間の中に、「制度後の後祭」すなわち生徒達が「打ち上げ」と呼ぶイベントがしばしば発生する。「打ち上げ」とは、言うまでもなくイベントの後に仲間で食事や遊びに出かけることを意味する。行事そのものがフォーマルな祭りだとすれば、この「打ち上げ」はインフォーマルな祭りである。儀礼の本体としてフォーマル度の高い「神遊び」としての「行事」を行い、そのあとに「人遊び」の要素の強いインフォーマルな儀礼が配されていると考えることもできる。教員の目が届くフォーマルな行事そのものよりも、完全に生徒達だけの世界が形成されるインフォーマルな「打ち上げ」にこそ、実は生徒達の行事後の変化や本音が見受けられ、ある部分においては行事と同等か、あるいはそれ以上に日常を異化する機能を持っているのではないだろうか。そこにコミュニティの秩序を作り出す機能も認められるのではないだろうか。

そこで本稿では、高校の「文化祭」「体育祭」の後に行われる「打ち上げ」で生徒達がカラオケに行くケースを主たる対象として、その様態や生徒の心理状態等を質的に分析していきたい。高校生を対象とするのは、そもそもインフォーマルな祭りである打ち上げという行

為を実施するためにはフォーマルな行事そのもの以上に生徒自身の行動力が必要となるからである。ある程度の経済的かつ行動的な自由も必須であり、その意味では中学生よりは高校生がふさわしい。また「文化祭」「体育祭」を取り上げるのは、学習指導要領に述べられている「儀礼的行事」「文化的行事」「健康安全・体育的行事」「勤労生産・奉仕的行事」「旅行・集団宿泊的行事」の5種の行事のうち、これら2つの行事が高校生にとって毎年必ず訪れるものであるからである。さらに、他の行事に比べ生徒が特に主体的に活動できる行事であるという点も重要である。実際に日常の異化が生じるためには、異化が生じやすい環境が求められるが、たとえば儀礼的行事は毎年行われるものの、それは生徒にとって堅苦しく、自分の入学式・卒業式以外の式典が今後の自分の生活に影響を与えるような大きな出来事になることは稀である。日常の異化という点では「勤労生産・奉仕的行事」と「旅行・集団宿泊的行事」も効果的だが、「勤労生産・奉仕的行事」は行事の精選といった事情によって、学校による実施の程度の差が大きい。また、「旅行・集団宿泊的行事」は必ずしも毎年行われるとは限らない。日常の異化を起こしてクラス内での関係性や生徒の価値観を再構築するという点では文化祭や体育祭が最も安定した効果を持っていると言えるだろう。また、「打ち上げ」の場面としてカラオケに焦点化するのは、実際に高校生に対して「打ち上げ」に関する聞き取り調査を実施したところ「カラオケに行く」という回答が多く得られたからである。「カラオケ」は昨今の若者にとってきわめて一般的なレジャーとなっている。例えば2013年版のレジャー白書によれば、カラオケ参加率の世代別1位は男女共に10代（男性10代は51.0%、女性10代は76.5%）であり（注8）、2012年版でも世代別1位は男女ともに10代である（男性10代は59.6%、女性10代は70.0%）（注9）。『別冊カドカワ』（2013年1月）に掲載された大手カラオケチェーン JOYSOUND 関係者へのインタビューによれば、自由になるお金や時間の関係から10代後半から20代前半に該当する高校生や大学生が主な客層であるということである（注10）。

そのように若者にとってポピュラーな場である一方で、カラオケには参加者同士の濃厚な気遣いの存在も指摘されている（注11）。後述する大学生に対する聞き取り調査でも、選曲や行動に気遣いが必要な場面があることが示されている。そのように立ち振る舞いが複雑であり、ときに繊細な気遣いを要するカラオケという特殊な場で「打ち上げ」が行われた場合、生徒達は一体どのような心理状態で時間を過ごすのだろうか。そしてまた、そこでは行事によって生じた日常の異化が行われ続けているのだろうか。

2 カラオケでの歌唱の意味

まず、先行文献の中で、カラオケで歌唱するという行為がどのように扱われているか整理したい。

小泉（1999）（注12）は、高校生を対象に調査を行い、高校生が日常的に聴いている「パーソナル・ミュージック」、カラオケで盛り上がるような世代共通の「コモン・ミュージック」、

世代の異なる音楽教師とコミュニケーションを図る「スタンダード・ミュージック」という3つの音楽の種類を使い分けていることを明らかにしている。そして高校生は「パーソナル・ミュージック」を学校やグループの中では隠し、逆にカラオケなどの公の場で「コモン・ミュージック」を仲間と歌うことで、私的感情を超えた連帯感を確認していると論じている(注13)。つまり高校生は友人とカラオケで歌唱する場合、「自分の好きな曲」よりも、「他の参加者が知っているであろう曲」を歌う傾向にあるということである。

宮台(2007)(注14)もカラオケでの若い世代の音楽享受について、仲間と盛り上がればいいものと捉え、カラオケボックスに行く場合には初めて紹介される友だちが混じることもあって、自分だけしか知らない歌を歌うことは極力避けられるとしている。また吉井(1984)(注15)も、そもそもカラオケの存在意味は、企業社会の人間関係の潤滑剤としての役割にあったとしている。この宮台と吉井の見解は、対象にずれがあるものの「カラオケで楽曲を歌う」という行為が参加者との連帯感を高めることを意図されている点では小泉が述べていることと共通している。さらに、前掲のJOYSOUND関係者は「みんなで盛り上がる曲」を今のミュージックシーンのキーワードだと位置づけ、AKB48、EXILE やゆずといったカラオケの参加者が掛け合って歌唱することで盛り上がることを指摘している(注16)。つまり、若者にとってカラオケとは、共通の認識されている楽曲を歌い合うことで友人との連帯感を高める場であることがわかる。そこでは、歌唱する本人しか知らない曲を歌うよりは広く認知された楽曲を歌う方がより目的に適った行為なのである。

一方で土井(2009)(注17)は、宮台や小泉らとは異なった角度から昨今の青少年にとってのカラオケについて言及する。土井によればカラオケは各自が好きな歌を勝手に歌い合っていれば参加者が時間と空間を共有できる場所であり、みんなで盛り上がるための場というよりも一緒にいる時間を「やり過ごす」ための場であると述べる。土井によれば、カラオケで何を歌うかは大した問題ではなく、カラオケで時間を共有することが参加者との関係性において重要なのだということである。つまり、「連帯感を高める」とまではいかないものの、先述した小泉ら3名も、土井も、カラオケという場での歌唱行為が若者(注18)にとって参加者との関係性の維持や形成に注目していることに違いはないが、何を歌唱するかという点では両者の認識にはずれがある。この認識のずれはどのように解すべきであろうか。

筆者(中西)は、大学生のカラオケにおける選曲行動について調査する上で就実大学の教養科目「ポピュラー音楽の歴史」受講生7名による座談会形式の聞き取りをおこなった。その詳細な分析は他の機会に譲るが、ここではその調査から、本研究に関わる部分を記述する。なお聞き取りの対象は、当該授業に積極的に取り組んだ受講生の中から調査の主旨を理解して協力を申し出た学生であり、カラオケを好み、よく利用する層という偏りを持っている。

聞き取り対象者 : 就実大学人文科学部・教育学部・薬学部1年生7名(女子5、男子2)

聞き取り年月日 : 平成26年7月25日(約45分間の座談会より)

聞き取り者 : 中西裕

記録方法 : ボイスレコーダーによる録音

発話者の表記 : 以下でA~Gと表記されるのは聞き取り対象の学生である。Nは聞き取り者(中西)を示している。また「口々」はほぼ同時に複数の聞き取り対象者が異なる発言していることを、「一同」はほぼ同時に複数の聞き取り対象者が同様の発言や同意の声を上げていることを示している。

N「カラオケにパターンがあるのかな、っていう」

口々「家族」「部活」

N「部活だと先輩後輩っていう感じなのね」

D「打ち上げの二次会とか。よし！ カラオケ行くぞ、みたいなノリで」

A「(略) 音楽系の同好会に入ってるんですけど、気の置けない関係なんですけど、でも選曲はやっぱり先輩もいるんで」

C「年の差があるとき、っていうのもちょっと」

N「ああ、目上がいるカラオケっていうのもあるわけね。で家族っていうのもあって、気の置けないのもあって、ちょっと気が張るやつもあると」

D「バイト先でとかもありますね」

F「気の置けないと言っても、その、曲のジャンルが一緒の子と曲のジャンルがバラバラな子ってあると思うんです」

A「ああ、ありますね」

N「あ、そうか。じゃあ、友達としては親しいんだけど、音楽の趣味が合ってるわけではない……」

B「ああ、あるある」

N「……て、いう場合は選曲のしかたが別なわけね？」

F「ボカロ※通用する子と、ボカロ嫌！ ていう子とだったら、やっぱり曲も変えなきゃいけないんで」(※「ボーカロイド」の略。「初音ミク」などの歌声合成ソフト「ボーカロイド」を利用して作られた楽曲)

A「たぶん一番気の許せるっていうのは、ジャンルもまったく同じ友達」

一同「うんうん」

F「私の場合は、気の置けない友達でもジャンルが違う子とかいるんですけど、(略)ジャンルがたとえ違ったとしても一緒に行って自分の好きな曲を入れたりとか」

B「私もそんな感じです。基本的に仲いい子でも(略)だいたいジャンル違うんですよ。でも、あっちも好きに歌ってるから、私も好きに歌おう、みたいな感じで」

A「(略)気の置けない友人二人とジャンルがまったくバラバラで、僕はアニメ音楽とかロックとか聞いて、もうひとはポップとか J-POP で、もうひとはアイドルソング歌うのが中心なんですよ」

B「すごいな (笑)」

A「僕は、この場合に限り自己中に歌う、っていう。気兼ねない友達なので、いちおう。ジャンルが違うだけで変わってしまうのはやっぱり考え物かなとは思いますがね」

G「やっぱり本当に仲いい子と行ったら何も考えずに入ってます。で、歌ってますけど聞いてないです、基本 (笑)。携帯いじってます。携帯いじって、『初めて聞く、この曲なに?』みたいな感じで聞いたりします」

〈中略〉

G「気の張る友達と行くと、歌いたくても歌えなかったら、すごいストレスたまるんで、そのストレスの解消にヒトカラ※に行きます」(※「一人カラオケ」の略)
一同「ああ、わかる」

カラオケには様々なメンバーによるものがあり、「気の置けない仲間」とのカラオケもあれば「気の張る相手」とのカラオケもあるということが述べられている。そして「気の置けない仲間」の場合には好き勝手に選曲し、「気の張る相手」との場合には基本的に皆が知っているであろう楽曲を選ぶのである。気の張るカラオケでストレスを感じてそれを「一人カラオケ」で自由気ままに歌うことで解消するという発言にはほぼ全員が同意の声を上げている。気の張るタイプのカラオケでの気遣いは、彼らの層の若者にとってかなりのエネルギーを費やすものであることがわかる。サークルの先輩なども混じる大学生の「打ち上げ」は気遣いの必要なカラオケに分類されるものだろう。

このことから前掲の土井と小泉らの見解の相違を考えれば、土井が主として「気の置けない仲間」とのカラオケを想定しているのに対して、小泉らがある程度「気の張る相手」とのカラオケを想定しているということが言えるだろう。

3 カラオケで行われる「打ち上げ」の様態

では、文化祭・体育祭といった行事の後に行われる高校生どうしの「打ち上げ」におけるカラオケの実際の様子を見ていきたい。複数の高校生グループを対象に筆者(玉木)が長期的に行った「打ち上げ」に関するエスノグラフィーをいくつか示していく。小泉(1999)はスクール・エスノグラフィーの課題として高校生が個々の嗜好を隠す傾向にあると述べている^(注19)が、玉木は愛知県内の高等学校や予備校においても講師を務めており、日常的に生徒とラポールと言うべき関係を築いている。以下の聞き取り対象生徒の発言がときに非常になれなれしい物言いになるのはそのせいであるが、同時にそれは彼らの本音を聞き出し得ていることの証左とも言えるだろう。

CESE1 「打ち上げ」に行く場所とカラオケでの「打ち上げ」1

聞き取り対象者：愛知県小牧市内の私立共学高校3年生の男女4名

聞き取り年月日：平成26年9月29日（学校の授業の合間の約5分間）

聞き取り者：玉木博章（下記ではTと表記、以下の聞き取りでも同様）

記録方法：携帯電話端末の音声メモ機能による録音（聞き取り時は忌憚のない本音を聞き出すために録音の事実は告げず、聞き取り終了後に聞き取り内容の匿名での公開の承諾を得ている。以下の聞き取りでも同様。）

T「ねえねえ、ちょっと教えて欲しいんだけどさ、今年の文化祭とか体育祭の後、打ち上げとかやった？」

A「うん、やったよー。全員は来てないけどね」

B「ああ、行った行った」

T「全員来てないんだ（笑）ちなみに何するの？ あ、今まで何した？ とかでもいいけど」

A「え、とりあえずみんなで飯いって。焼肉とか？ あと、ボーリングとか、カラオケとか。とりあえず集まる？ みたいな？」

C「うちカラオケとか嫌なんだよね」

T「なんで？」

C「何か時間の無駄じゃん。それよかみんなで話してた方がいいし。〇〇（店の名前が入る）とか。そこでずっといいって言ったし」

T「そうなんだ。でも結局行ったんだよね？」

C「うん。まあ」

D「〇〇（Cの名前が入る）、そんなこと言ったってナンダカンダ楽しんどったじゃん」

C「まあ行けばねー。でも好きじゃないしー」

A「てか、とりあえずやることが大事じゃね？」

B「とか言って来ない奴いるじゃん」

T「ああ、そうなんだ。ありがとう」

ここでは「打ち上げ」の内容が選択的であり、「会食」や「ボーリング」と並んで選択肢の一つにカラオケがあるということが語られている。また、Cについては、「カラオケを好まないが、それでも皆が行くということになれば拒みはせず、行けばそれなりに楽しむ」という姿勢が語られている。

CASE2 カラオケでの「打ち上げ」2

聞き取り対象者：愛知県名古屋市内の私立共学高校3年生男子2名

聞き取り年月日：平成25年10月3日木曜日（学校の昼休みの約5分間）

T「10組優勝したね。団結ってカンジだったじゃん」

H「まあ、みんなは」

I「僕達は関係ないから」

T「え、でも〇〇（名前が入る）君達だって試合出たでしょ？」

H「出たけど。出ただけだし」

I「疲れたよね」

T「何か打ち上げとかあったらしいじゃん？ 行ったの？」

H「え、あ。はい、一応」

T「一応？」

I「カラオケだったんですよー」

H「行っても歌わないから。恥ずかしいし、下手だし、歌いたくないし」

T「え？ ということ行ったんでしょ？」

H「何か、とりあえず行ける人は行くみたいな感じで。でもカラオケとかホント行かない
んで。〇〇（Iの名前が入る）もだろ？」

I「〇〇（クラスの中心的な生徒の名前が入る）君が、みんな歌えて言ってたけど。どうせ歌っても誰も聞いてないし」

H「やっぱ行かなきゃ良かったよな」

T「楽しくなかったんだ？」

H&I「はい」

H・IはCASE1のCと同様カラオケを好まないが、Cが「行けば行っただで楽しむ」のに対して「行っても歌わない」「歌いたくない」「歌っても誰も聞いていない」といった、より強い否定感情を表明している。しかしここで注目すべきは、「カラオケには（普段は）行かない」というH（おそらくIも）が「行かなきゃよかった」と言いながらも実際には「打ち上げ」のカラオケに参加しているということである。行事の祝祭感の伴わない日常的な場においてはカラオケに参加しないこのような層が、行事後の「打ち上げ」の場合には参加せざるをえないものを感じているのである。ここには、日常の時空の中では発動されない、特別な種類の強制力や同調圧力が存在しているといえるだろう。

ではカラオケで歌唱することにポジティブである層は、行事後のカラオケの場をどのようなものと捉えているのだろうか。

CASE3 カラオケでの「打ち上げ」3

聞き取り対象者：愛知県名古屋市内の私立共学高校三年生女子3名

聞き取り年月日：平成25年9月25日水曜日（授業前の約5分間）

T「8組打ち上げやった？ カラオケ行ったらしいじゃん」

E「おー。玉ちゃんよく知ってるね？」

T「いや、さっき話とったやん（笑） 何歌ったん？」

F「え？ まあ割と王道？ 恋チュンとか？（笑）」

G「そうそう。盛り上がりそうなやつ入れるよね。とりあえず入れとけーみたいな。歌うしね。それか男子に投げるか（笑） 確か○○（男子の名前）がさ」

〈中略〉

F「でもさ。実際○○（聞き取り調査に参加していない友人の名前）とか、○○（男子の名前）の目とか超気にして大人しかったしね（笑）」

G「そうそう、ウけるよね（笑） いつも結構歌うのに」

T「あんまりいつもと違うカンジだったんや？」

E「あー。そうだねえ。ナンドカンドみんないるしね」

T「てか、お前らでもそういうの気にするんだな（笑）」

E「は？ どういうことそれー」

T「気にしなさそうじゃん」

F「もう玉ちゃんいかんし。授業寝るー」

G「マジ傷ついたー」

T「はは（笑） わかったわかった」

行事後のカラオケにおいては、気の置けない仲間とのカラオケのように「好き勝手に」歌うのではなく「盛り上がりそうな」楽曲が意識的に選択されることが語られている。そのような場合にふさわしい楽曲を「王道」と表現しているが、これは小泉（2007）の言うところの「コモン・ミュージック」であろう。実例として挙げられている「恋チュン」はAKB48のヒット曲「恋するフォーチュンクッキー」だが、単にヒット曲として認知率が高いだけでなくアップテンポで覚えやすいメロディーラインの明るい楽曲で、また振り付けも比較的平易で素人が真似しやすく、「みんなで歌う」あるいは時には「振り付きで歌う」という盛り上げに効果的な楽曲である。

後半では、その場にいない別の女子生徒が、日常のカラオケにおいては同席しない特定の男子生徒の目を気にして大人しく振舞っていたことなどが語られているが、話題になっている女子生徒は普段は同級生に対しても比較的是っきりとした態度の生徒で、教員に対しても物怖じせず思ったことを口にするタイプの生徒である。またE・F・Gも同様なタイプだが、

「みんながいる」ということで「盛り上がる曲」を選択するというような気遣いをしているのである。行事後のカラオケが普段のそれと違う「特別感」を帯びていることがわかる。この場合は普段参加しないメンバーの存在によるものだが、「打ち上げ」という「インフォーマルな祭り」において日常の場においては発動されない種類の気遣いが発生することも、場が持つ祝祭性のひとつの要素と言えるだろう。普段とは違うメンバーがいることで、場を盛り上げようとしたり、その目を気にして普段と違う行動を取ったりすることは、彼女たちなりに日常の異化を起こそうとしていることと解することもできるかもしれない。

CASE4 カラオケでの「打ち上げ」4

聞き取り対象者：愛知県豊田市内ならびに岐阜県岐阜市内の高校2年生の男子2名

聞き取り年月日：平成26年10月25日月曜日（予備校の授業の合間の約5分間）

T「あ。ねえ、そういえばさ。二人の学校は、今年学祭の後とか打ち上げやった？」

J「あ、はいやりましたよ」

K「うちも、やりました」

T「え、どんなカンジ？ どんなカンジ？ どこ行っただの？」

J「普通に、ご飯食べて、カラオケとか」

T「お、そうなんだ？ ○○（Kの名前が入る）君のそこは？」

K「うちも、同じですね。焼肉とか、去年はパスタとか。ご飯食べて。それでまあ適当に、遊んで」

T「どっか行っただの？」

K「いや、公園で鬼ごっこしたりとか（笑）」

J「それやばいな（笑）」

K「そうそう（笑） そしたら警察来てさ。誰かが通報したみたいで。大変だったし（笑）」

T「そうなんだ（笑） 俺も中学の時似たようなことあったけどね（笑） でも、どこかお店行かなかったの？ それこそカラオケとか？」

K「まあカラオケは、高校生時間あるんで。入れないんですよ。面白いと思うんですけどね。あとお金とか。夜は高いんで」

T「あ。なるほどね。でもJ君のそこはカラオケ行っただんでしょ？」

J「そう、ですね」

T「雰囲気どんなカンジ？ 歌いたい曲とか歌う？」

J「あ、そうですね。ガンガン。もったいないんで」

T「気遣ったりしないの？」

J「する奴もいるんですけど」

T「○○（Jの名前が入る）君はしないんだ？」

J「そう、ですね。あんま、僕は気にしないです」

T「なるほど。みんなそうなの？」

J「あ、はい。割とそういうの気にしないですね。仲いいですし。てかいい人しか来ないですし」

T「なるほど、最初っから楽しいだろうって思うメンツしか来ないんだ。そういうメンツだと確かに楽しいわなあ」

まず注目したいのはJが「ご飯食べて、カラオケ」に行くという「打ち上げ」の形態を「普通に」と修飾している点である。CASE1でカラオケが選択肢の一つであると述べたが、ここではカラオケという選択がきわめて一般的なものであるということが語られている。民俗学的視点によれば芸能は神事性と娯楽性の二面性を持つが、神事（儀式）から芸能（娯楽）へと展開するという現象を早く折口信夫が指摘していることは周知のとおりである（注20）。前出の「ボウリング」も技芸という意味での芸能性を帯びてはいるが、カラオケはより明確に芸能であり、祝祭の一部として一般的なものと認知されていることは故あることと言える。これに対してKも同意するが、時間や値段などの理由で選択しなかったことが語られている。その代わりに行われたのが、警察に通報されるほどに「ハメをはずした」雰囲気で行われた鬼ごっこである。これを博多の宮崎宮の「玉せせり」や日本各地で広く行われている「喧嘩祭り」などのアナロジーで捉えることはあながち的外れではないだろう。行事後の「打ち上げ」に日常を異化する祝祭性があることは、高校生も無意識に感じていることなのである。

もうひとつJの発言からわかることは、CASE3までのカラオケと異なり、気を遣わないのカラオケもあるということだ。大学生への聞き取り調査でも語られたように「気の置けない仲間」との気遣いのいらぬカラオケは、行事後の「打ち上げ」の場面にも存在しているのである。この種のカラオケをどう解したらよいだろうか。

ここには二つの見方が可能である。ひとつは、祝祭性が乏しく、単なる日常の延長にすぎないという見方である。元々良好な関係性を築いている者達の絆がいつそう深まるということはあるが、それ以上の想定外の関係性の構築や行動は望めない可能性が高い状態ということである。例えば土井（2008）（注21）はクラスが一つのまとまりとして成立しづらく数人程の小さなグループの内部で人間関係が完結してしまい、クラス全体の統一性や一体感が生まれにくくなっていることを問題視しているが、このCASE4の事例は、まさに数人程の小さなグループで心地よく人間関係を完結させている状態と言えるかもしれない。

もうひとつの見方は、たとえ気心の知れたいつものメンバーであったとしても、上述したように「喧嘩祭り」ともパラフレーズできそうな「鬼ごっこ」と並立されるほどの祝祭性が行事後のカラオケにはある、というものである。こう解せば、日常を異化して気の置けない仲間とも「出会い直す」ことができる意義深い場とも言えるのである。

これを明らかにするためには、行事後のカラオケを通じて生徒達が何を感じ、何を得たの

かということに関する調査・検討が必要であるが、本稿では両様の解釈の可能性を指摘するにとどめざるを得ない。

4 まとめと今後の展望

本稿では行事後、特に体育祭や文化祭の後の「打ち上げ」の実態について先行文献を整理・検討し、そして実際の聞き取り調査を基にした分析を試みた。学校行事の後の「打ち上げ」として行われるカラオケには、フォーマルな祝祭のあとの「インフォーマルな祭り」としての機能があり、そこに原初的な祝祭性を見ることができる。それを「宵祭り」「本祭り」「後祭」という祭りの伝統的構成の中に位置づければ、カラオケには「後祭」としての儀礼的な側面を認めることができる。しかしながら、行事後の「打ち上げ」のカラオケにおいて、生徒の成長に資するような日常の異化作用が現実にとれほど生じているのかということについては、更なる検討を要する課題であることもわかった。

かつて、日本の村落共同体においては「若者組」と呼ばれる組織が存在した。共同体の若年男子を原則として全員参加させ、厳しい行動規範を持ち、共同体の一人前の大人となるべく訓練される教育機能を持った組織であり、後の「青年団」の前身となる存在である。この若者組が共同体における祭りや芸能を司ることも多く、その活動を通じてコミュニティの秩序を作り出す機能を有していた^(注22・23)。現在の若者に関して言えば、学級を単位とした固定的なコミュニティはかつての「若者組」のような明確な輪郭と厳しい帰属感を持つものではなく、多分に不安定な流動性をもったものになっている。その中で、生徒達の自発的な活動としての「打ち上げ」には一定の機能が期待されるのである。

小泉は、音楽に関する聞き取り調査の際、高校生の心理状況と行動に関して以下のように述べている。

最も困難なことは、学校において高校生はパーソナル・ミュージックを包み隠そうと様々な戦略を駆使するため、教室の中のポピュラー音楽が何重もの層を成して構造化している点にある。むしろ、生徒が学校でパーソナル・ミュージックについて語らないのはなぜか、という課題を中心に添え、その背後にある教育的諸制度のイデオロギーについて考察することが求められているといえよう。^(注24)

ここに示唆されるように、高校生がそのように自らの嗜好を隠さざるをえない状況を作り出す学校もしくは学級のありかたそのものの問題にも目を向けることが必要であり、それと同時に、友人との関係性の観点からカラオケでの「打ち上げ」という祭りを捉えていく必要もあるだろう。その折に我々が留意すべきことは、そこでいかなる日常の異化が起きているのか、という参加者の心理変化に敏感になることである。

〔出典ならびに注〕

- 注1 文部科学省. 高等学校学習指導要領. 平成21年版, 2011.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf,295p. (参照2014-11-5)
- 注2 藤井 (2012): 藤井啓之. 学校の文化活動を捉え直す. 全国生活指導研究協議会「生活指導」. 明治図書, 2012,699,92p.
- 注3 桑原 (2008): 桑原麻里. 文化祭から自分史へ 作文がつかないクラス. 全国高校生活指導研究協議会「高校生活指導」, 青木書店, 2008,178,20-27p.
- 注4 藤田 (2008): 藤田隆介. 祭り、その後に. 全国高校生活指導研究協議会「高校生活指導」, 青木書店, 2008,178,28-35p.
- 注5 奥井智之訳. コミュニティ 安全と自由の戦場. 筑摩書房, 2008, (Zygmunt Bauman. 2001,COMMUNITY: SEEKING SAFETY IN AN INSECURE WORLD, Polity Press Ltd. Cambridge の邦訳). なお、邦訳版101頁では「カーニヴァル」を「祭り^{カーニヴァル}」と訳されているが、本稿では原著の“carnival”に従いそのまま「カーニヴァル」と表記した。
- 注6 川端香男里訳. フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化. せりか書房, 1980, (Михаил Михайлович Бахтин,1965, *Творчество Франсуа Рабле и народная культура средневековья и ренессанса*, Москва. の邦訳).
- 注7 藤井 (2012). 71p.
- 注8 日本生産性本部. レジャー白書2013. 生産性出版, 2013,42p.
- 注9 日本生産性本部. レジャー白書2012. 生産性出版, 2012,32p.
- 注10 ふくりゅう. “カラオケ JOYSOUND に聞く、ボカロ文化最前線！なぜボーカロイド楽曲は人気なのか”. 別冊カドカワ 総力特集ニコニコ動画 未来はユーザーの手の中. 角川マガジンス, 2013.
- 注11 “「1人カラオケ」若い世代で増加 一気疲れイヤ「独唱」謳歌”. 流通新聞「日経MJ」, 2012-7-27,16p.
- 注12 小泉 (1999): 小泉恭子. “高校生とポピュラー音楽 —教育の場におけるジェンダー分化のエスノグラフィー”. 鳴り響く〈性〉. 北川純子編. 勁草書房, 1999,33p.
- 注13 小泉 (1999), 45p. ならびに 小泉 (2007): 小泉恭子. 音楽をまとう若者. 勁草書房, 2007. による
- 注14 宮台 (2007): 宮台真司; 石原英樹; 大塚明子. 増補サブカルチャー神話解体 一少女・音楽・マンガ・性の変容と現在. 筑摩書房, 2007年, 176p.
- 注15 吉井 (1984): 吉井篤子. “現代の音楽文化”. 消費社会の広告と音楽. 林進; 小川博司; 吉井篤子. 有斐閣, 1984.
- 注16 前掲『別冊カドカワ』, 88p.
- 注17 土井 (2009): 土井隆義. キャラ化する／される子どもたち —排除型社会における新

たな人間像. 岩波書店, 2009.

注18 小泉、宮台、土井はそれぞれ著述の対象としている年齢層が若干異なる。小泉は高校生を対象にしていることが明記されているが、若者について述べることの多い宮台は大学生を対象にした調査を基にしつつも高校生くらいまでを想定して発言していると推察される。また学校の人間関係等を述べることの多い土井は小学生から高校生くらいまでを想定していると推察できる。本稿の著述対象は高校生であるため、小泉の先行研究をベースにしながら、必要な箇所は宮台と土井の研究を参考になっている。なお宮台と土井の調査対象を推察するに至った参考文献として宮台真司『制服少女たちの選択』（講談社, 1994）や土井（2008）を挙げておく。

注19 小泉（1999），35p.

注20 折口信夫．“日本芸能史六講”．折口信夫全集第18巻．折口博士記念古代研究所 編．中央公論社，1967,333-417p.

注21 土井（2008）：土井隆義．友達地獄 ―「空気を読む」世代のサバイバル．筑摩書房，2008.

注22 福田アジオ．“わかものぐみ”．日本民俗大辞典 下．福田アジオ；神田より子；新谷尚紀；中込睦子；湯川洋司；渡邊欣雄 編．吉川弘文館，2000,825-826p.

注23 天野武．若者の民俗．ペリかん社，1980.

注24 小泉（1999），35p.